

「小京都」論と「大京都」形成

—歴史都市京都の近代化

上野 裕

‘Little Kyoto’ theory and ‘Large Kyoto’ formation

Hiroshi UENO

要旨

京都の歴史的重層性と都市形成の関わりを「小京都」と「大京都」のもつ意味から検討してみた。「小京都」は歴史都市の個性や生き方の象徴であるとともに、人間的スケールという都市のあり方を再評価することでもある。「大京都」は直接には昭和初期の京都の市域拡大によって生まれたことではあるが、それらの町村編入が疏水建設や都市計画など近代化政策実施の前提条件となることから、京都の近代化を示すことでもある。しかもそれら政策は条坊制など歴史的ストックを生かし実施されることが多い。歴史都市の象徴と京都の近代化が、全国的視点からみた「小京都」と京都自体をみた「大京都」とにそれぞれ対応し、両者は歴史を継承し生かすという点で整合することでもある。このことは、都市が時代と地域的条件の変化に対応し生き残り発展できるとともに、都市の独自性や多様性という視点からそのあり方を問うともいえよう。

1. はじめに

1895年に平安京遷都1100年記念祭、合わせて第4回内国勸業博覧会が京都市の岡崎地区で行われた。記念事業として平安京を模した平安神宮の造営、琵琶湖疏水完成とそれによる工業化など様々な発電事業の成果、そのほか市街電車の開通、時代祭・都をどりの創始など京都のもつ伝統とともに近代化の成果を、この岡崎の地から全国に発信した。このイベントによって、京都は千古の歴史をもつ歴史都市として、また近代都市としての性格を確固たるものとし、その両面を引き継ぎ今日に至っている。この歴史都市と近代都市の整合性がどのように関わり合うのかの検討は、近代以降の都市発達を理解するうえで意義のあるものとなろう。本稿では「小京都」と「大京都」という相反することばをとりあげ、それぞれどのような意味をもって

いるのか、それらが京都の都市形成とその重層性にどのように関わっているかを検討することから、歴史都市と近代都市の整合性の一端を明らかにしたい。

2. 「小京都」論

「小京都」といわれる都市は、自称も含めれば100以上にもなる。このような傾向は、現代社会の中で、また都市のあり方を考える中で、なんらかの意味をもつように思われる。一般に、京都イコール歴史や伝統的文化の生きづく街とイメージされ、この「小京都」は歴史の古い都市の個性や生き方を象徴的にかつわかり易く示す言葉である。ここでは、小京都を構成する要素やシンボルとの関わり（共通性や相違点など）から、その数の増加する意味や要因を考えてみたい。

「小京都」ということばが一般的に使われるようになったのはいつ頃からかといえば、第2次大戦後それも高度成長期に入ってからのものである。経済的発展とともに拡大してきた旅行ブームと対応しつつ「小京都」都市が増えてきた。故郷性の再発見ともいうべき「ディスカバージャパン」のスローガン、さらに観光雑誌などでの小京都特集の発行などの下で、古い町並みの残る、ひなびた都市へ多くの人々が訪れるようになった。1970年代の後半には「小京都連合」という組織が生まれ、20数都市がこれに加わった。そして、1985年には、京都市の観光協会主催で第1回全国京都会議が京都を含め26都市の参加をえて開かれた。以後、毎年、参加都市持ち回りで会議が開催され、1997年には52市町が参加するまでになった（表1）。現在は金沢市、盛岡市、松本市などが不参加で46市町とわずかながら減少傾向にある。

全国京都会議への加盟基準は、①京都に似た自然景観・町並み、たたずまい、②京都と歴史的なつながり、③伝統的な産業・芸能のうち最低一つの条件を満たすことで、歴史の古い都市には決して厳しいものではない。これは結成の主な目的が観光の振興にあることと関わろう。歴史学でいう「小京都」は中世後期の領国文化の拠点で京都との関係が深い都市、山口、土佐中村、一乗谷などを指すが、それよりは明らかに観光の枠組あるいは情緒的な概念でとらえられる。したがって、今日「小京都」ということばは、歴史的都市にとってその歴史性を認知される点で、またそれらの都市の本山としての京都の中心性を高める点で、双方にプラスの影響が大きく働いているといえよう。寺社、華道、茶道などの本末制度における京都と地方都市の関係に類似する。

「小京都」都市の多くは、城下町を起源とし、かつては地域中心としての役割を担っていた。しかし、明治以降、政治・交通における中心性を喪失し、それにともない経済力をも低下させていった。それは人口面にもみとれる。5万人未満の都市が55%（28都市）、10万人未満のそれは80%（41都市）を占めることとなる。これら市町の多くは、その立地から資本主義経済の空間的なネットワークの中で結節性をもつ都市とはなりにくかったことによるといえよう。

「小京都」論と「大京都」形成（上野）

表1 「全国京都会議加盟都市」一覧

都 市	人口	起源	歴史的景観(都市景観)	伝統産業	文化(祭, 行事)	その他(京都とのつながり)
北海道 松前町	1.2	城	寺町, 藩屋敷, 城	杉木工, 桜押し花しおり	城下時代祭	北前船
青森県 弘前市	17.8	城	武家, 商家, 城, 長勝寺	津軽塗, こぎん刺	ねぶた祭, さくら祭	
岩手県 盛岡市	28.6	城	町並, 城跡, 報恩寺	南部鉄器	チャグチャグ馬コ, さんさ踊	
遠野市	2.8	城(宿)	寺町, 曲り家	木彫りカッパ, わら細工	遠野まつり, 遠野昔話祭	
水沢市	6.0	城	武家, 商家, 黒石寺	南部鉄器, 秀衡塗	日高火防祭, 蘇民祭	
秋田県 湯沢市	3.6	城	町並, 酒蔵	酒造業, 曲木製品, 湯沢こけし	七夕絵どうろろ祭, 大名行列	京文化(奥方・公家出身)
角館町	1.5	城	武家, 商家, 天寧寺	櫛細工, いたや細工	さくら祭, ささら舞	京風都市(藩主・公家出身)
山形県 酒田市	10.1	港	商家, 山居倉庫, 浄福寺	船簞笥, 絵ローソク	港まつり, 舞娘	北前船
山形市	25.4	城	町並, 蔵, 寺町	紅花染, 山形鑄物	花笠まつり, 山寺紅葉祭	紅花を通じての京文化
宮城県 村田町	1.3	城	商家と蔵, 村田城大手門	ほていこけし	伊達宗高まつり, 蛇藤祭	
茨城県 古河市	5.9	城	武家, 商家の土蔵		提灯竿もみまつり	
栃木県 足利市	16.6	城	足利学校, 町並	足利織物, 藍染	足利祭り, 鎧年越	
栃木市	8.5	城	商家の土蔵	鬼面瓦, 民族玩具	栃木まつり(人形山車)	
佐野市	8.4	城・宿	善盤目, 佐野匠除大師	天明鑄物, ひな人形	浅間の火祭, 人形祭	
埼玉県 小川町	3.8	宿	町並, 大聖寺	和紙, 酒造業		
新潟県 加茂市	2.4	門	町並, 青海神社	桐タンス	加茂まつり, 雪椿まつり	京都の賀茂神社の社領
長野県 松本市	20.6	城	商家, 蔵, 城, 旧開智学校	手毬, つむぎ	お船まつり, 天神まつり	
飯山市	2.7	城	雁木造の家並, 城跡	飯山仏壇, 内山紙	桂松榮燈籠祭	
飯田市	18.7	城	善盤目, りんご並木	水引細工, 飯田紬	人形刺, 飯田りんご	
富山県 城端町	1.1	門	町並, 善徳寺	城端塗, 仏壇, 絹織物	城端曳山祭, むぎや祭	
石川県 金沢市	45.4	城	武家屋敷, 茶屋敷	金沢箔, 漆器, 友禅, 九谷焼	百万石まつり	
岐阜県 高山市	6.6	城	善盤目, 高山陣屋	一位一刀彫, 飛騨の家具	山王祭, 八幡祭	宮川, 東山などの地形
郡上八幡町	1.7	城	善盤目, 城	藍染め, 郡上紬	郡上おどり, 八幡まつり	
愛知県 西尾市	9.9	城	町並, 実相寺, 長門寺	三河一刀彫	てんてこ祭, 西尾まつり	
犬山市	7.1	城	町並, 城, 明治村	犬山焼	犬山祭, 犬山鶴飼	
福井県 小浜市	3.3	城・港	町並, 城跡, 明通寺	若狭塗, 和紙, 瑪璃	お城まつり, お水送り	鯖街道
大野市	4.0	城	善盤目, 城, 寺町	越前和紙, 水引細工	城まつり, 朝市まつり	京都を模した町づくり
三重県 伊賀上野市	6.1	城	武家, 商家, 城	伊賀くみひも, 伊賀焼	忍者まつり, 天神祭	
京都府 京都市	138.9	平安京	善盤目, 町並	西陣織, 清水焼	葵祭, 祇園祭	
兵庫県 出石町	1.1	城	善盤目, 城, 宗鏡寺	出石焼, ちりめん	愛宕の火祭, 神社例祭	
龍野市	4.1	城	町並, 城跡, 醤油蔵	醤油, そうめん, 孔雀焼	桜まつり	
篠山町	2.2	城	武家, 商家	竹細工, 丹波木綿, 黒大豆	デカンショ祭, 春日能	
鳥取県 倉吉市	5.1	城	商家と土蔵	倉吉かすり, はこた人形	打吹まつり, 風のまつり	
島根県 松江市	14.7	城	武家屋敷, 城	出雲めのう, 和紙, 布志名焼	どう行列, 水郷祭	
津和野町	0.7	城	商家, 武家	石州和紙, 竹人形	鷺舞, 流鏑馬神事	
岡山県 津山市	9.1	城	街道沿の商家, 寺町	作州かすり, ねり天神	津山まつり	
高梁市	2.6	城	武家, 土塀, 商家, 寺町	備中神楽面, ひな人形	備中松山踊り	
広島県 竹原市	3.3	港	棒瓦の町並, 西方寺	竹細工	祇園祭, 頼山陽顕彰神事	京都下鴨社の荘園
三次市	4.0	城	鳳源寺, 風土紀の丘	三次人形, 志和地焼	きんさい祭	
尾道市	9.4	港	町並, 千光寺, 浄土寺	い草製品, 郷土玩具	港まつり, 大菊人形	
山口県 山口市	13.6	城	善盤目, 八坂神社, 瑠璃光院	大内塗, 人形	祇園祭, 古熊天神祭	京都を模した町づくり
愛媛県 大洲市	3.9	城	蔵屋敷, 城跡, 如法寺	王子谷焼, 手まり	鶴飼	
徳島県 那賀川町	1.0	城	西光寺, 万願寺	木工製品	阿波公方薪能, 阿波の八部まつり	京文化
高知県 中村市	3.5	城	善盤目, 一条神社		大文字送り火, 公家行列	京を模した町づくり
安芸市	2.2	城	武家屋敷, 城跡	内原野焼	つつじ祭	
福岡県 甘木市	4.3	城	武家, 商家, 城跡	葛菓子	観月会, 春祭り	
大分県 日田市	6.4	天領	商家と土蔵	日田下駄, 小鹿田焼	鶴飼, 祇園祭, 天領まつり	
佐賀県 小城町	1.7	城	町並, 須賀神社	小城羊かん	山挽祇園, ホタル祭	
伊万里市	6.0	城・港	レンガ造り煙突, 武家屋敷	伊万里焼, 手漉和紙	トンデントン祭, どんちゃん祭	
宮崎県 日南市	4.8	城	武家, 城址, 藩校	飫肥杉木工品	城下まつり	
熊本県 人吉市	3.9	城	武家, 城址	キジ馬, 花手箱, 球磨焼酎	おくち祭	
鹿児島県 知覧町	1.4	城	武家, 城址	知覧傘提灯	小京都ふるさと祭り	

人口は1995年現在, 単位: 万人, 「城」は城下町, 「宿」は宿場町, 「港」は港町, 「門」は門前町 (全国京都会議「小京都」などより作成)

逆にそのことが、古い町並みなどの景観、伝統的な祭事や産業を残してきた。こうした伝統的要素は過去の遺産として残っているだけではなく、観光や伝統産業などそれぞれの都市の存立基盤の一つとなる有利な条件でもある。そして何よりも、歴史・文化が息づくあるいは故郷性のある都市は、これまで経済性、効率性を追求し発展してきた近代以降の東京型都市（東京と

その支社経済都市、企業城下町、コンビナート都市など）と対峙する側面をもっている。

京都と「小京都」は、歴史文化を都市更新の柱の一つとする点では共通し、京都型都市ともいうるが、両者には都市人口規模だけでなく都市づくりの過程に大きな違いがある。京都は明治以降、ヨーロッパの技術を積極的に導入し伝統的な手工業の近代化をはかり、研究機関（舎密局、勸業場など）や大学の設置をすすめ最新の科学技術をベースとした工業を発展させてきた。歴史的伝統の中に近代的なものを積極的に取り入れつつ更新をはかってきた。他方「小京都」都市は、金沢などいくつかの都市を除けば、明治という大きな社会変革の中で歴史的に蓄積された人材、資金の多くが流出し、新しい技術の導入が難しく明治以降の都市更新が十分にはなしえなかった。さらに、戦後の高度成長期にも乗り遅れた（乗らなかった）ことで都市規模の拡大をはかることができなかった。

何故「小京都」、あるいは京都型都市なのか。明治以降とくに高度成長期以降、都市は生産と消費の拡大再生産の場となりその規模を大きくしていく中で、土地問題、交通渋滞、公害など自己矛盾を生み、そのあり方が問われてきた。都市がもつ本質の一つであるが、これまで二次的な位置にあった「都市は快適な生活の場」という観点の再認識が、人間的スケールの都市「小京都」へ私達を向かわせているように思える。さらに「小京都」の伝統的な要素を、残されたという消極的ではなく創造の源とすることが、今求められている個性的で魅力ある都市更新につながる。

3. 「大京都」形成プロセス

明治以降の積極的な近代化政策の推進は、古都の復興を図り、その規模を拡大していく。西欧の近代技術を導入した伝統産業の発展や新しい工業の萌芽・成長は、新たな雇用を創出し再び多くの人々を集めることとなる。しかも、こうした産業活動の発展や人口の増加は、市域を越え広域的に行われ、周辺町村の編入という形で進められていく。「大京都」はこうした市域の拡大と人口や産業活動の空間的展開によって生みだされた。

1) 市域拡大と都市基盤整備

京都市は現在827.9km²、1,466.6万人（2009年）からなるが、それらの明治からの拡大過程は図1に示すごとくである。明治初期には23万人ほどを維持し（近世後期は約30万人）、市制施行の1889年には28万人、琵琶湖疏水が完成した1890年頃には約30万人、1907年には40万人を超えた。三大事業（第二疏水建設と水道事業、発電事業、街路拡築と軌道敷設）が実施され多くの労働力が流入した大正期には50～70万人と急速な増加をみ、人口は近代化事業の発展とともに急増していく。そして周辺町村でも工場立地、人口の増加が顕著となっていく。

こうした市域を越えた都市化に対し、統一ある都市基盤整備事業を実施するために、市域の拡大、周辺町村の編入が順次進められていくことになる。市域拡大は都市基盤整備事業との関

わりから大きくは4期に分けられよう（図1、表2）。第1期のそれは、市制施行の1889年までに進められた、鴨川以東で京都市街に隣接する南禅寺村・岡崎村など9村の編入からなる。大規模ではないが、疏水事業、それに伴う工場の進出、旧第3高等学校の誘致、さらに三条以南の東山の公園地化の構想など、近代化のための諸事業の実施を目的とした編入であった。当該村では将来的な発展をみこし、編入への反対はほとんどなかった。

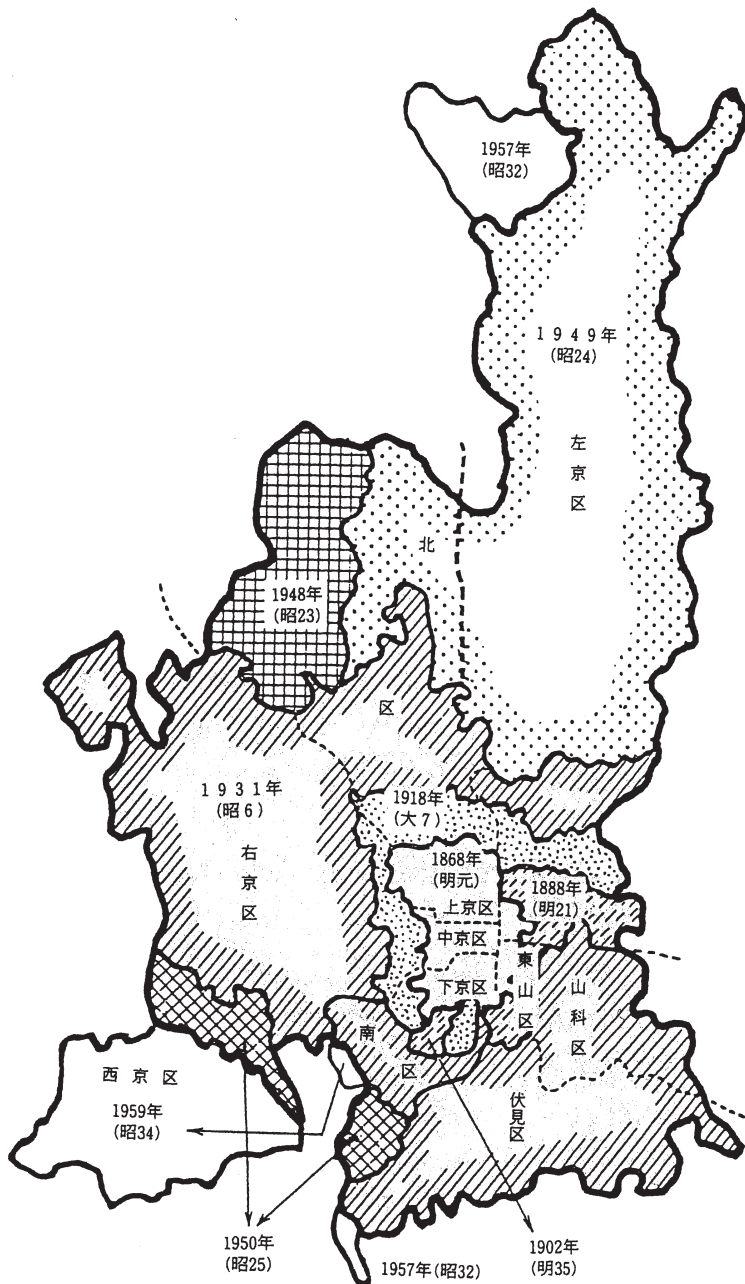


図1 京都市域の拡大過程
（京都府『京都市町村合併史』
1986年による）

表2 京都市への市町村編入推移

	編入年	編入地域	編入区	総面積	人口
第1期	1868(明治元)	北は鞍馬口通, 南は七条通, 東は鴨川, 西は千本通		18.4	24.5
	1879(明治12)	区政施行: 上京区, 下京区			22.4
	1888(明治21)	愛宕郡浄土寺村, 岡崎村など7ヶ村 紀伊郡今熊野村, 清閑寺村	上京 下京	29.8	23.6
第2期	1889(明治22)	市政施行			27.9
	1902(明治35)	葛野郡大内村・西九条の一部	下京	31.3	38.7
	1918(大正7)	愛宕郡鞍馬口村, 下鴨村など7ヶ村 葛野郡衣笠村	上京 上京	60.1	64.0
		葛野郡朱雀野村, 七条村など4ヶ村 紀伊郡柳原町, 東九条村など3ヶ村	下京 下京		
第3期	1929(昭和4)	上・下京の区分, 左京・中京・東山区の新設			
	1931(昭和6)	右京・伏見区の新設, 愛宕郡上賀茂村, 大宮村, 鷹ヶ峰村 愛宕郡修学院村, 松ヶ崎村 宇治郡山科町 紀伊郡吉祥院, 上鳥羽村 葛野郡嵯峨町, 花園村など10ヶ村 伏見市, 紀伊郡深草町, 竹田村など6ヶ村 宇治郡醍醐村	上京 左京 東山 下京 右京 伏見 伏見	288.7	95.2
第4期	1948(昭和23)	葛野郡中川村, 小野郷村	上京	325.3	100.1
	1949(昭和24)	愛宕郡雲ヶ畑村	上京	535.2	105.3
		愛宕郡岩倉村, 八瀬村など7ヶ村	左京		
	1950(昭和25)	乙訓郡大枝村	右京	548.5	110.2
		乙訓郡久我村, 羽束師村	伏見		
	1955(昭和30)	上・下京の分区, 北・南区の新設			
	1957(昭和32)	北桑田郡京北町広河原	左京	577.1	121.0
		久世郡淀町	伏見		
	1959(昭和34)	乙訓郡久世村	南	610.6	121.9
		乙訓郡大原野村	右京		
	1976(昭和51)	東山・右京の分区, 山科・西京区の新設			
	2005(平成17)	北桑田郡京北町	右京	827.9	147.4

(『京都市府市町村合併史』1986から作成)

面積はkm² 人口は万人

明治の人口(市政施行前)はそれぞれ1873, 1876, 1881年の数値である。

第2期は、1918年、隣接する16町村からなり市域を大きく拡大した。第一次大戦景気による工業の発展が、京都にも多くの工場や労働力流入をもたらし、市周辺での人口増加を進めていった。めざましい都市発展の過程で実施されていく編入であったが、その大部分が京都市から電気の供給を受けるなど日常生活上京都市と深いかかわりをもち、市街地もコナベーションした地域であった。ただ、農村的な段階にとどまっていた上鳥羽などの編入から、その底流には工業用地の確保などを含め将来発展の予想される地域を事前に編入し、都市計画等を容易に進めうるなどの考えが知れる。当時の木内知事の「京都市は今後工業の都として将た遊覧の都とし是を二要素として将来の発展を図る所なかるべからず」にもそのことが現れている。しかし、

深草町のように町内に多くの工場をもち都市化にともなう諸施設を整える財政力をもった町村では編入に反対した。この時期は、都市化に対して大都市京都に編入することで財政難や諸施設を整備しようとする町村と、大都市近郊として自立を続ける町村とに大きく二分された。

しかし、編入過程では各町村から京都市へ、小学校の設置や運営を学区に委ねる学区制の廃止と戸別税の変更の強い希望が出されていた。学区制については、学区自体は存続するものの、教員給支給は市が統一支弁することで教育行財政の統一化を図ることし、税制については、持家・借家にかかわらず一戸を構える者すべてにかかる戸別税を周辺町村と同じ家屋に課税する家屋税に改められた。いずれも1918年の施行であるが、ここに至るまで地域のもつ異なる条件に折り合いをつけることでようやく編入が進められたのである。

第3期では、1931年の1市26町村の編入によって市域が一挙に4.8倍に達し、いわゆる「大京都」の成立をみる。第一次大戦後、周辺町村では、拡大する市街地のコントロールが困難で街路など都市基盤整備のための財政力が不足し、また不況も重なり多くの場合京都市への編入を強く希望し陳情も積極的に行われた。そうした中で、会社・工場240余り、人口33,000人余をもつ伏見町と師団および工場の誘致に成功した深草町は一貫して編入反対の立場にあった。また府財政を本部・郡部・連帯に分ける三部経済制（1881年制定）が都市部に著しく有利で郡部に大きな負担を強いていたことへの不安も要因の一つであった。

そうした中で伏見町はその人口数と経済力をもって1929年に市制を施行する。この動きは、各種の都市計画事業の統一の実施のうで時代の要請を無視したとの批判を受け、伏見市や深草町を紀伊郡町村から孤立させていった。しかし、京都市にとって、この南部工業地帯の市町村との合併は将来の都市的発展の鍵であることから、府・市議会での大討論をへて、また伏見市および深草町の条件を受け入れることで編入が1931年に実現された。とくに、伏見市の条件は伏見の名称存続、道路や水道などのインフラ整備、学校や病院の社会施設の継承など30項目に及んだ。この年に三部経済制も廃止されることとなった。この時期の大規模な周辺市町村の編入は、すでに設定されていた最初の都市計画区域に対応したもので、将来の都市化を見据えた広域的な都市圏の視点で進められたとみてよからう。

そして最後の第4期は、第二次大戦後の編入で多くの農村部を含む町村からなる。これらは主に市北部の葛野郡、愛宕郡と市南西部の乙訓郡、久世郡からなる。前者は古くから幹線道路を通して木材・薪炭や生活必需品の売買を京都と行っていた。後者は農業中心の村が多かったが、近い将来には工場地帯としての発展が期待されていた。マクロにみれば第3期の延長線上にあり都市圏と市域が一致する方向で編入が進められてきたといえよう。

「大京都」という用語は第3期の大規模な市域拡大で世に出たのであるが、それは市域拡大あるいは都市圏の形成だけではなく、都市計画法の実施のもとでの近代都市づくりの基礎の完成を示し、以後の都市はこれに基づいて様々な事業を展開していくことになる。なお、この時代、京都のみならず1921年の名古屋、1925年の大阪、1927年の横浜、そして1932年の東京と、

それぞれが大規模な市域拡大を行い、都市規模のまさに都市間競争が行われた。

2) 「大京都」形成と鉄道交通

明治以降の市域拡大は都市基盤整備を進め、近代京都を形成し、今日の都市発展にも大きく影響しているといえよう。最後にそれらの市域拡大を直接、間接に進める要因となった鉄道交通の進展、整備について簡潔にふれておきたい。

京都と周辺地域を結ぶ鉄道交通は、昭和初めまでにほぼ現在の形態を整えるが、その変遷は以下のである（図2）。

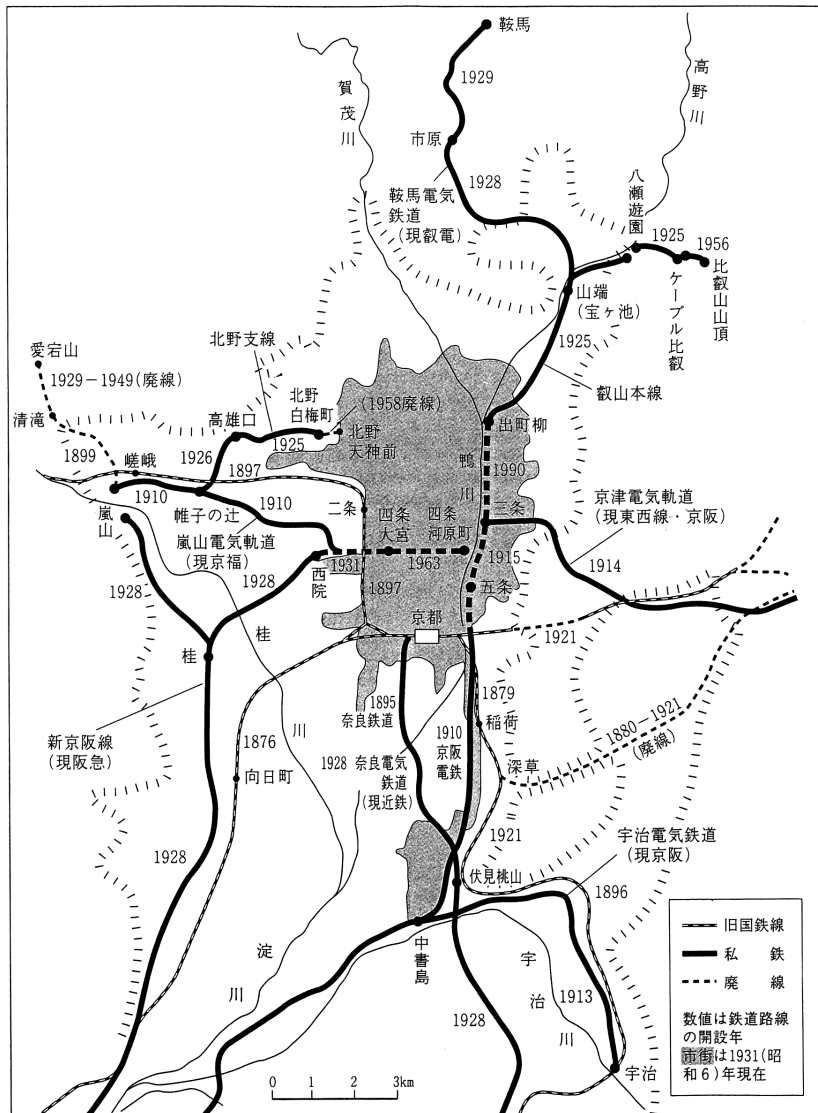


図2 京都周辺の鉄道路線の展開

まず旧国鉄を中心とした幹線鉄道の変遷についてみよう。1876年に京都駅建設で大阪と結ぶ路線が開通する。さらに、1880年には伏見の稲荷から桃山丘陵を越え山科を経て大津まで延び、東京とも結ばれることとなる。1921年には、東山、逢坂山の両トンネルの掘削により現在のルートに変更され、稲荷経由ルートは廃線となる。奈良方面へは、1896年には奈良鉄道によって通じる。この鉄道は1907年に国有化され、その後京都・伏見間は奈良電鉄に払い下げられ、1963年には近鉄に併合され現在にいたる。また旧東海道線の深草までの部分は、新設された深草・桃山間の新線と合わせ現在のJR奈良線となっている。なお、北部の京都鉄道が1897年に嵯峨まで開通し、その後国有化され山陰本線となりその後綾部、舞鶴まで延びる。

次いで、私鉄を中心とした都市間と郊外鉄道交通の変遷である。私鉄による都市間鉄道は、旧国鉄とはそのルートを異にし開設される。大阪へは、京阪電鉄が1910年に淀川左岸沿いに大阪に通じ、1913年には宇治線も開通させる。奈良へは、上述した奈良電鉄（現近鉄）が旧奈良線の京都・伏見間を受け継ぎ、伏見以南では木津川左岸を走り通じることとなる。伏見市街地では、地下水への影響から酒造業の反対にあい高架線にせざるをえなかった。1928年には新京阪鉄道（現、阪急京都線）が、淀川右岸沿いに西院・高槻間および嵐山・桂間を開通させ天満橋や梅田と結ぶこととなる。これによって低湿地であるがゆえ市街地化の遅れた西南部の開発が進んでいく。

以上のような鉄道の開通は、多くの人々の郊外居住を進め市街地そして市域の拡大をもたらすこととなる。大正期から昭和初めに開通が集中することがそれらの現象と対応するとみてよからう。なお、私鉄の先がけは、景勝地の嵐山と四条大宮を結ぶ1910年の嵐山電鉄の開通や1925年の八瀬帷子・出町柳間の京福電鉄の開通（現、叡山電鉄）にみられるように、市街地の路面電車と接続させ郊外の行楽地を結ぶ手段としての役割を担った。

4. おわりに

都市は時代と地域的条件の変化に対応することで生き残り発展していく。明治以降とりわけ高度成長以降の都市は生産と消費の拡大再生産の場としての性格を強める一方で、都市の持つ独自性を見直す動きの一つとして「小京都」論が現れた。「小京都」は歴史都市の個性や生き方の象徴であるが、積み重ねられてきた重層的な都市の歴史と人間的なスケールの都市の再評価でもある。それは「小京都」都市だけのものではないが。

他方「大京都」は昭和初期の大規模な市域拡大によって生まれたことばである。しかし、それは、周辺町村の編入という空間的広がりや京都復興のための疏水建設、街路拡築・新設、用途地域指定などと連動することから、京都の近代化を象徴することばとしても捉えられる。しかもそれらの中に、家屋税への変更や三部経済体制の廃止など地方行政制度の政策転換とともに、条坊制や天正地割の影響を受けるがごとく格子状市街地の広がりが存在する。この近代化

は、歴史を外に追いやるのではなく、むしろ培われてきた歴史的ストックを生かすことでもある。都市のもつ地域的な資源としての歴史をいかに生かすかが問われているのである。

「小京都」は全国を対象とする大きなスケールから、「大京都」は都市自体のスケールから都市のあり方を問うことばといえよう。これまでの経済的利潤追求という一元的な都市のあり方から、むしろ独自性をもつ都市、価値観の多様な都市をどのように創造していくかが課題となろう。

参考文献

- 1) 戸所隆：「東京型都市開発と京都型都市開発」『転換期に立つ地域の科学』古今書院 1996
- 2) 二場邦彦：「京都と小京都都市」、二場邦彦&地域研究グループ『京が甦る』淡交社 1996
- 3) 森谷尅久：「小京都論・その成立と展開」歴史公論 8-12 1982
- 4) 京都市：『京都都市計画概要』京都市 1944
- 5) 京都府総合資料館：『京都市町村合併史』京都府 1968
- 6) 丸山宏ほか編：『みやこの近代』思文閣出版 2008
- 7) 中川理：「まちづくり史における近代とは」高橋・中川編『京・まちづくり史』昭和堂 2003
- 8) 京都市：『京都市政史 第1巻 市政の形成』京都市 2009
- 9) 伊藤之雄：「都市経営と京都市の改造事業の形成」伊藤之雄編『近代京都の改造』ミネルヴァ書房 2006
- 10) 松下孝昭：「京都市の都市構造の変動と地域社会」伊藤之雄編『近代京都の改造』ミネルヴァ書房 2006